

『私考』 高政と鯰江系譜

林 寅 喜

(会員・佐伯市中ノ島)

鶴藩略史と佐伯志が伝える毛利氏の系譜によれば、藩祖高政の祖備前守高久は、宇多源氏から出て近江（滋賀県）守護職となった六角佐々木氏の子として生まれ、出羽守藤原乗定の養子となって鯰江氏を称え、五代孫定春の時「森」氏と改めたという。

この系譜を丹念に調べていると幾つかの疑問点に行き当たる。そこでこれを解明するため、私は去る七月十五日滋賀県愛東町役場を訪ねて教委の担当者から直接話を聞き、関係する資料等提供して貰った。

それは愛智郡志（今は愛知と書く）と言い、大正の中頃発行されたもので、郡内に割拠した群雄の氏素姓を文献に基づいて収録しており、信憑性は高いという。この中から鯰江氏に関係した部分をコピーして貰い、これをもとにして既刊の歴史書などと対照しながら私なりに解

明して見た。

◆はじめに鯰江の所在地について

鯰江は滋賀県愛知郡愛東町大字鯰江と言ひ、愛知川の河岸に連なる丘陵地帯で、中戸・妹・曾根と帯状に続いて集落があり、古くは奈良興福寺（和銅三年「七一〇」建立）領の莊園として栄えた土地で、その莊官（莊園の



愛東町内 城(館)跡一覧表(平成2年3月現在)

No	城(館)跡名	所在地	時代	立地	現 状
1	上岸本城跡	上 岸 本	中世	平地	水田・山林
2	鯨江城跡	鯨 江	室町	◇	宅地・水田
3	中戸城跡	中 戸	中世	◇	◇
4	井元城跡	妹		◇	山 林
5	曾根城跡	曾 根		◇	宅 地
6	青山城跡	青 山	室町	◇	山 林
7	勝鳥城跡	小 倉	室町	◇	水 田
8	小倉城跡	◇	中世	◇	宅地・山林
9	山口城跡	外	◇	山麓	山 林
10	平尾館跡	平 尾		平地	宅地・水田
11	池之尻館跡	池 之 尻		◇	宅地・山林
12	梅林館跡	梅 林		◇	宅 地
13	百濟寺館跡	百 濟 寺 丙		◇	◇
14	百濟寺城跡	百濟寺乙丙丁		山腹	山林・寺地
15	北坂本城跡	百 濟 寺 戊	室町	山頂	山 林
16	大菽城跡	百 濟 寺 甲	◇	◇	◇

長の命を受け荘園内の仕事を掌る者」として鯨江氏が居城を構えていたという。もともと、ここに城を築く以前は中戸に城があったと言い、それ迄鯨江には森氏が在地領主として居館を構えていたこと等から、森村とも呼んでいたという。なお、中戸を除く三地区には今も鯨江姓があり、妹には森姓が多いという。また、前記四地区で春日神社を祭祀しており、古くから京や奈良との関わりがあったことも知った。

◆毛利氏に伝わる系譜

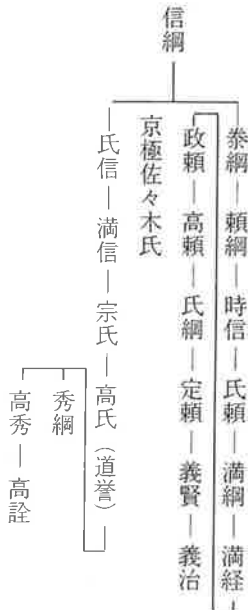
毛利氏の系譜は次の通りである。(鶴藩略史による)
高久(備前守) — 尚昌 — 義堯 || 為定 — 定秀

定春(備中守)
政次(十郎左衛門尉) — 重政
高次(九郎左衛門尉) — 高政

高久は六角五代満綱の子として生まれ、鯨江城の主出羽守藤原乗定の養子となったとしている。前にも書いたが、毛利氏系譜にいう宇多源氏と六角氏、さらに鯨江氏や森氏との関係は不明瞭で分かりにくい、このことから説明して行かないと理解し難い。そこで、はじめに六角佐々木氏と鯨江氏の関係から書いて行くことにする。

◆佐々木氏の系譜(大日本人名辞典による)

六角佐々木氏



◆佐々木一族の別離

治承四年（一一八〇）伊豆で挙兵した源頼朝に従い、四年後の寿永三年宇治川の合戦で梶原景時と先陣争いをして、その名を馳せた佐々木高綱の長兄定綱は、文治元年（一一八五）諸国に置かれた守護地頭職のうち近江守護職に任ぜられた。定綱の跡は嫡子広綱が継いだ。承久の乱（一二二二）に加担した廉によりその子ともども処刑された。代わって跡を継いだ弟信綱は、乱後愛智川以南六郡を三男泰綱へ、以北四郡を四男氏信に分ち与えた。泰綱は観音寺城（安土町）に據って六角佐々木氏の祖となり、氏信は伊吹山太平寺城（伊吹町）に據って京極佐々木氏の祖となった。このようにして佐々木源氏は六角氏と京極氏の二統に分かれ、のちには相争うようになる。

◆六角佐々木氏の歩み

泰綱の跡は頼綱・時信・氏頼と続き、五代孫の満綱は永享六年（一四三四）足利幕府の命を受けて、延暦寺圓明院や金輪院の所領没収を行ない、同寺領の五ヶ所を焼き打ちするなど暴挙に加担している。その後文安二年（一四四五）になって長子持綱次子時綱と親子間で争って敗

北し、自刃した。この満綱の子が鯉江藤原乗定の養子となった高久である。しかし、前記の愛智郡志によれば、これは満綱の三男三郎高昌とするが、三男は幼名を六郎と言いつ出家したとしている。したがって、高久は四子以下ということも考えられる。

満綱の死後満経・政頼と続き、十五年後の寛正元年（一四六〇）には、八代を継いだ高頼が年表等に出てくるので、短期の間に三代の世代交代があったものと思う。

高頼は寛正の初め頃から永正十七年（一五二〇）に没するまで、その生涯を合戦に明け暮れ、應仁の乱（一四六七―一四七七）を初めとして戦国時代初期までの間をその渦中に生きた。

跡を継いだ氏綱は、高頼に先立つ二年前の永正十五年に没しているが、生前は父高頼と共に乱世を生きていたことがこれも年表等によって明らかである。

氏綱の跡は定頼が継ぎ、その跡を継いだのが義賢（承禎）である。

一方、永祿九年（一五六六）に入ると六角佐々木氏の被官であった鯉江貞景は、織田信長の侵攻に備えてその居館鯉江城を修復し拡充した。最も当時鯉江庄の支配は



んとした織田信長に敵対したため、九月になって近江に進攻して来た織田軍によって、前衛の拠点であった箕作城（五箇荘町）を陥された。この落城によって居城観音寺城兵が浮足立ち、観念した義賢は二子義定と共に城を捨てて伊賀に逃れたが、程なくして鯉江城に入った。貞景は三雲新左衛門と共に城の堀を深くし、塁を高くして義賢・義定父子を迎え入れ防備を固めたとしている。これには佐々木氏の家臣であった愛智川の在地武士團三井・森・武田氏などが加わり、総勢一万余となった。

下総の住人攝津氏（後記）

に移っていたが、攝津氏は鯉江城に来ることなく森村の森氏を城代としていた。そうしたことから新鯉江城は

旧城と森城を併せた広大なものとし、翌十年八月完成、城主に義賢の嫡子義治（義弼）を迎え入れた。

義賢は翌永祿十一年足利將軍義昭を擁して京に入ら

それから二年後の元亀元年（一五七〇）になって四月に入り、帰国のため二万の兵を率いて京を發つたという織田軍の動きを知った義治は、これを奇襲せんとして市ヶ原に布陣した。よって織田軍は前進を阻まれ、信長は一旦難をさけて鈴鹿を越え、美濃に帰つた。

義賢は初め信長と手を結んだ浅井長政と敵対していたが、長政が信長と不仲になった朝倉義景討伐の頃から誼を通じ、鯉江城に入り守りを固めていた。

六月になって、義賢父子は一揆を糾合して笠原（野洲郡）に陣を敷き、織田方の武將柴田勝家・佐久間盛信軍と戦つたが破れ、再び伊賀に逃れたが、十一月には和睦



している。

しかし、三年後の天正元年（一五七三）三月になって嫡子義治が反旗を翻し、貞景と共に鯉江城に立て籠もり、佐久間・蒲生・丹羽・柴田等の織田軍勢に包囲された。そこで同月七日、義治は全軍を率いて討って出た。ところが、十一日には城方の婦女子を避難させていた百濟寺（愛東町）が焼き打ちされて壊滅し、九月になって再び柴田軍の三方攻めに逢い、戦わずして開城、同月二十八日城は焼かれ、佐々木源氏の流れを継ぐ六角氏も、鯉江城と共に歴史の上から消えて行く。

その後天正十年（一五八二）に本能寺の変が起こり、代わって羽柴秀吉が跡を継ぎ、続いて徳川家康と天下取りの時代は移った。義賢は天正九年（一五八一）キリスト教の洗礼を受けるなど数奇な運命をたどったが、慶長三年（一五九八）七十歳で没している。

◆鯉江系譜について

初代高久は六角満綱の子であったとは前にも書いた。しかし、この高久が三男三郎高昌と同一人物なのか分らないし、愛智郡志では三男は出家したとあるから、四男以下の子かも知れない。また、この時鯉江の城主であつ

た出羽守藤原乗定という人物も大日本名辞典には見えないが、愛智郡志によれば当時奈良七犬寺領や春日社領の荘官と、下司職の多くは藤原姓を名乗ったといわれ、興福寺も春日神社と共に藤原氏の社寺であったことなど



三つ柏の家紋丸の鯉江氏

から、藤原氏を名乗ったのではないかと。高政が藤原姓を名乗ったのもこれによるものと思う。

父六角満綱が自刃した文安二年（一四四五）から推定すれば、南北朝の終わりから應永年間（一三九四―一四二七）あたりと考えられる。したがって、守護職は六角四代氏頼から五代満綱の頃となるので、その被官となっていたことは略々間違いないだろう。二代尚昌は足利九代義尚にも仕えたという（佐伯志）。そのあと義堯^{（行）}為定と続くが、為定は三条大納言為秀の子である。

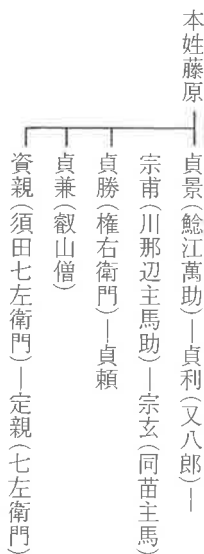
三条家は閑院宮家から出た実行^{（よねゆき）}が祖となっているが、系図の中に為季なる人物は見当らない。しかし、三条大納言とあるから実在した人物に相違ないが、系図には頭^{（かしら）}に為の字がついた名前は見当らない。このあと定秀・

定春と続く。

愛智郡志によれば、鯉江氏の正統は定春ではなく貞景のようである。定春は同書の中で鯉江三吉家に伝わる系図として貞景の兄とあり、天正元年九月鯉江落城後義治と共に備後に逃れていたが、天正十八年（一五九〇）秀吉に召し出されて千五百石を受け大坂に移った。そこは今の城東区今福東及び西の地域で、鯉江の名は区立小・中学校名として残っている。

毛利氏系譜では森村に移って森姓と改めたとしており、この点が全く違う。また、政次・高次の弟二人がいて高次の子が高政となっているが、三吉家系図では貞景の弟は秀国と言い、天正二年（一五七四）伊勢長島の一方向一揆の戦いで討死している。

鯉江系図と鯉江三吉家系図は次のとおりである。
鯉江系図



鯉江三吉家系図

定春 天正元年九月鯉江城没落後、六角義治と共に江州を立退き、備後国尾道浦に住み、同浦光明寺に大石碑を建立した。のち天正十八年千五百石を与えられて秀吉に仕え大坂に移った。そこを備前島と呼んだという。

貞景(満介)

秀国(又一郎) 天正二年七月十六日伊勢長島の一方向一揆に於いて、川之内で討死

注：定春が建立したという石碑について尾道市の光明寺に電話で問い合わせたが、今は無いと言っていた。

なお、愛知郡志では鯉江氏の祖三郎高昌(高久と同一人物かも知れない)以後貞景までの歴代は明らかでない。そこで止むなく鶴藩略史と佐伯志に従って書いたが、定春の弟政次と高次の二人はどこにも載っていない。

◆森氏について

森氏は鯉江氏から出ており、佐々木源氏の流れを継ぐ一族ともいう。古くから森村(鯉江を森と呼んでいたとは前にも書いた)に住み、攝津中務大輔政親の被官として鯉江荘のうち西泉・坊名を領していたが、京都嵯峨臨

川寺領と接続していたために再三にわたって境界争いを生じ、長享元年（一四八七）森氏から幕府に提出した文書には太郎左衛門尉の署名があるという。

臨川寺領はその昔鯉江氏の支配地であった関係からか、同族間で境界争いが絶えなかったのかも知れない。その森氏も永禄十一年（一五六八）の鯉江籠城には参加しており、六角佐々木一族の在地武士団として活躍していたものと思う。

◆高政の出生と永禄二年年譜

高政は寛永五年（一六二八）に七十歳で没しているから、生まれたのは永禄二年となるので、系譜にいう定春が城を出て森村に移った時は既に十五歳になっていた。したがって、この限りでは尾張荒子村説は信用出来ない。それを強いて荒子生まれとするならば、十五年以前つまり永禄二年より前に尾張へ移住していなければならぬ。しかし、鯉江氏の歴史を見る限りではその形跡は全くない。まして定春にいたっては鯉江落城後六角義治と共に備後に逃れているから、政次・高次とは何も繋がっていないことになる。

次に高政が生まれた永禄二年に於ける歴史上の主な動

きを見ると次の通りである。

一、二 織田信長上洛して將軍義輝に謁見する。

三、 岩倉城の織田信安を追い略尾張を平定

四、二七 上杉景虎二度目の上洛を果たして義輝に謁見する。

五、 一 景虎参内する。

六、二七 武田晴信、景虎上洛の留守を衝いて信濃及び越後に侵入。

九、 晴信またも上野の安中・松井田に侵入。

一〇、二六 景虎京より帰国

このように信長・景虎・晴信と三者三様に虎視眈眈として天下を狙っていた時代である。なお、晴信はこの年剃髪して信玄と号した。

◆出生について

系譜では海（開）東郡荒子莊花筏村で生まれたとしている。日本地誌(2)愛知県編の中に、明治二十四年（市町村制度が施行になって三年後）の名古屋市と周辺の地図が載っていて、その一角に荒子村の地名が見え集落がある。これによって荒子は古くから村を形成していたことが分かる。今は名古屋市中川区荒子町と変わっているが、

合併前は海東郡に属していた。なお、付近に花筏という地名は見当たらないが、同じ中川区内に花池・花塚という地名は今もある。

高政の父、高次は羽柴秀吉に仕えたというが、それは荒子が秀吉の生まれた中村（同市中村区）に近かったことからであろうか。外に愛知郡荒子村ではないかという説もあるが、同郡に荒子という地名はない。これは大方鯉江荘が近江愛智郡であることからこちらと混同したと考えてよいだろう。

高政の尾張出生説は系譜によるしかないが、そうすると政次・高次と定春の結びつきが怪しくなる。そこでひよっとして政次と高次兄弟は定春の子ではなかったのではと考えて見たが、これを立証するものは何もない。よって高政の年令をもとにして定春の歳を推計して見た。すると天正十八年（一五九〇）秀吉に仕えた時が余りにも高齢となり過ぎて現実にそぐわない。少なくとも当時四十代か五十代前半でなければ理屈に合わぬ。とすれば、兄弟説に信憑性はあるが、これは鯉江三吉家系図に示す通り、政次・高次とは無縁である。

こゝで一つ気になることがある。それは毛利氏系譜に

いう初代高久と定春に『守』が付けられているのに対し、政次・高次には『尉』の位しか付けられていないということである。要するにこれは格式の違う家から出た者と考えてよい。つまり主家と分家の違いではないだろうか。そう考えて見ると政次・高次は鯉江氏の直系ではなく、森一族の出ではないかということである。もともと森氏は鯉江氏から分かれており、古くは森太郎左衛門尉という『尉』のつく人物もいたこと等から、森氏の血筋を引く者として生は受けたが、主家を去って尾張に住み着き、のち秀吉に仕えたのではあるまいか。その時期は秀吉が信長に認められて出世街道に乗った墨股築城の二年前、即ちより多くの家臣を必要としていた永禄七年（一五六四）前後と考えるのが至当であろう。この永禄七年には高政も既に六歳になっていたから、秀吉（この時三十歳）の落胤説が生まれたのかも知れない。

結論的には今一つ資料不足のため確証は得られないが、毛利氏系譜にいう鯉江氏の直系であるというのには甚だ疑わしい。

では何故このような系譜を残したのか、理由はいろいろと考えられるが、その一つとして江戸時代の大名家は

祖先の家系を大切にする一方で誇示する傾向も強かった。その現れがこのような考えさせる系図として残ったのではあるまいか。

主な参考図書

鶴藩略史 佐伯志 佐伯市史 愛智郡志（愛東町提供）
全国歴史散歩「滋賀愛知編」（河出書房） 日本分県地
図（人文社） 日本歴史シリーズ（世界文化社） 歴史
群像（学研） 別冊歴史読本（新人物往来社） 人物日
本の歴史（小学館） 日本の合戦（人物往来社） 日本
人物総覧（新人物往来社） 大日本人名辞典（講談社）
城つてなんだろう（愛東町提供） 民族流入年表（愛東
町提供） 日本地誌（二宮書店）

表紙解説

城山は標高僅か一四四米の小さな山です。その山頂には毛利藩二万石の城跡があり、苔むした石垣に昔日の面影を偲び、うつ蒼と茂る老木に歴史の重みを思わずにはいられません。

今から丁度百年の昔、佐伯に教師として赴任して来た文豪国木田独歩は、好んでこの山に登り称賛しています。佐伯を離れて他郷に住む人達が古里の山河を思う時、先ず險に浮かぶのは城山の姿ではないでしょうか。

今は市民の憩いの場として、或いは健康保持のため登山する人は終日絶えることがありません。

この絵は昭和三十年代の初め、佐伯市職が発行していた機関紙（今は廃刊）の表紙に請われて書いたそうです。この絵に秘められた温もりと自然の美しさに惹かれ、今回菅家の承諾も得て掲載しました。